

现代日语感情词研究

◎ 许罗莎 著

乙



北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS

现代日语感情词研究

许罗莎 著

北 京 大 学 出 版 社
北 京

图书在版编目(CIP)数据

现代日语感情词研究/许罗莎著. —北京: 北京大学出版社, 2005. 1
ISBN 7-301-07928-1

I. 现… II. 许… III. 日语-词汇-研究 IV. H369

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2005)第 010419 号

书 名: 现代日语感情词研究

著作责任者: 许罗莎 著

责任编辑: 杜若明

标准书号: ISBN 7-301-07928-1/H · 1191

出版发行: 北京大学出版社

地 址: 北京市海淀区成府路 205 号 100871

网 址: <http://cbs.pku.edu.cn>

电 话: 邮购部 62752015 发行部 62750672 编辑部 62753374

电子邮箱: zpup@pup.pku.edu.cn

排 版 者: 北京华伦图文制作中心

印 刷 者: 北京大学印刷厂

经 销 者: 新华书店

890 毫米×1240 毫米 A5 8.125 印张 233 千字

2005 年 1 月第 1 版 2005 年 11 月第 2 次印刷

定 价: 15.00 元

序文

言語研究には、研究者が自国語、即ち、生得の言語について直接自覚・反省を加える研究がある。その国の伝統的な文芸形態について、みずからの表現の方法や内容に対して考察する場合である。例えば、日本語の場合、和歌の作法に対する文法的研究などがそれである。また一方、研究者がその言語の生得の使用者でなく、比較・対置的な関心や、時には経済・政治的な意図等により、その手段として関心を抱く場合がある。いわば戦略としての必要性から研究される場合である。例えば、戦時における諜報活動などである。その目的にもよるが、対象となる言語使用者の倫理的・心情的特徴の解明に主眼が置かれる。これは常に言語に対する観察的立場をとる。他国の言語とのすり合わせが、却って日本語の特徴をそのまま示していることは、キリシタン資料や幕末の外国人の日本語研究の教えるところである。外国語使用者が日本語を研究する場合は、観察者として鋭い分析がなされ、それが語彙研究、意味論的な研究となりやすいのは当然である。

日本語は中国語の影響を承けて発達した。文字の借用、漢語語彙の輸入とそれらの日本語化による日本文化の構成は、日本語の生成、発達過程において様々な特質を示している。近年の中国からの留学生の採り上げた課題は、日中同形語の研究というものであった。文字（漢字）の使用上、同一の表記の語が存在するのであるから、その語の意味の異同に着目することは自然である。これは、中国の人が、日本語を使用する場合の特に重要な留意点であり、対象とし

やすいのは仕方がないとも思う。しかし、日本語と中国語の比較研究を行う場合、文字・表記面にのみ着目していると、その言語の使用者の日常における精神・心理面は対象となりにくい。漢文として我々に馴染みの「血淚相和して流る」（長恨歌）は平安時代の古典に「血の涙落ちてぞたきつ」（古今和歌集）などとある。「喜怒哀楽」という日常的な心情表現が日中の間でどのような類似性を持つのか、または、差異は何か、彼我の影響は如何という点に中国の研究者が着目するのは大いに意義のあることである。両国語に通じている許羅莎氏が同形語の研究から進んで、心情表現の体系的研究と語彙研究に関心を抱いたのはまさに人を得たものと言える。

許氏は埼玉大学大学院において日本語の感情表現の分析に成果を挙げられ、その後、東洋大学大学院博士後期過程に学び、日本語と中国語の語彙比較を深められた。氏は、専心学業に励まれ、疑問があれば時を選ばず問題を投げかけてきた。その頃は東京の電車の事故遅延が多かった時期であったが、レクチャーを約束した教員が時間に遅れても、研究室の前の廊下にじっと座って待っていた姿を思い出す。何事にも誠実であるというのが良い。同じ中国からの留学生の発病（これは許氏にとっても残念なことであったと思う。）ということがあったが、氏は連日献身的に努め、中国関係の対応は細部にわたり配慮をしてくれた。日中両国の関係については、こういう小さな誠意が友好の大きな礎となるのである。氏が博士論文を中心として、ここに研究成果を刊行されることは本当に喜ばしい。学界にとって裨益することは言うまでもないが、研究としてはさらに深める必要があろう。一層の研鑽を願うものである。

2004年4月26日

根上剛士

まえがき

本書は1997年9月に日本の東洋大学文学研究科に提出した『感情に関する類義語の研究—「怒り」「喜び」「悲しみ」を中心に—』と題する博士論文を加筆修正したものである。本書の執筆にあたって、多大な時間と労力を費やし、暖かく激励しつづけ、指導してくださった故鈴木一彦先生、鈴木一彦先生の後を快く引き受け、熱心に厳しく指導し、多くの有益な助言と示唆を与えて下さった根上剛士先生に心より御礼を申し上げる。博士学位論文審査に当たられた根上剛士先生、坂詰力治先生、大島建彦先生、新田幸治先生に深く感謝申し上げる。本書の草稿に目を通し、貴重な助言と暖かい励ましをしてくださった小松寿雄先生、山中信彦先生、上野恵司先生、佐治圭三先生、鈴木英夫先生にあらためて感謝の意を表わしたい。また、直接的、間接的に本書に関心を示し暖かく見守ってくださった方々にもお礼を申し上げたい。

さらに、留学期間中、奨学金を提供してくださった日本財団法人ロータリー米山記念奨学会、株式会社三州製菓、2003年4月から客員研究員として一年間お世話になった神戸女学院大学にもこの機会を借りて厚くお礼を申し上げる。

なお、本書の刊行にあたっては、勤務校の中国広東外語外貿大学2001年科学研究費補助金の助成を受けた。

私は1982年7月中国の福建師範大学外国言語文学部日本語学科を卒業した。日本語を選んだ理由は単純、かつ幼稚なものであつ

た。私の学んだ小学校では、小五から英語の授業があった。母国語の中国語の発音は r [ʒ] を除いてすべて清音のため、当時の私は、英語の b, d, g, j … などの濁音がたいへん苦手であった。それが原因で散々親に叱られた（親は中国某大学の外国語学部の教師であった）。英語は怖い、親の厳しい教えはもっと怖いという思いが大学進学まで続いた。1970 年代前半、中国では外国語ブームがおこった。両親からは、同僚の先生にお願いするから、外国語のうち、一か国語を必ず習得しなさいと要求された。子供の時からの英語の濁音に対するコンプレックスと、親の厳しい指導から逃げ出したいという単純な理由で、日本語を選んだわけである。しかし、日本語にも 20 ほど濁音があることが後で分かった。

故大平正芳総理大臣就任中、日中文化交流の一環として、日本の文化科学省（当時文部省）と中国教育部は、中国における大学の日本語教師を養成するため、五か年計画（1980. 9～1985. 7. 毎年 120 人の規模）で、日本人教師による日本語研修センター（大平学校とも称した）を中国北京に設けた。私はその第 5 期生で、1984 年 9 月から、そこで一年間の研修生活を送り、佐治圭三先生、鈴木英夫先生、倉持保男先生をはじめとする数多くの諸先生方に大変お世話になった。その時に芽生えた語彙研究・日中対照研究の夢が、その後 11 年間に亘る私費日本留学によって実現できたのである。

表意文字漢字の特徴は「音・形・意」の三要素を持ち、日本語における漢語は昔中国から伝わってきたものであるため、「形・意」の二要素が中国語と同じ、いわゆる同形同義のものが多。これは中国人日本語学習者にとって好都合である。ところが、長い歴史の流れの中で、同形語でも少しずつ意味的变化が生じてきた。そのうえ、日本で作られた漢語（例えば、「癩癩」「立腹」な

ど)は同じ漢字で構成されていても、独特の意味を持ち、中国人にとっては、やはり外国語である。

私費日本留学の間、中国語の語学教師(日本人を対象に)などのアルバイトをしながら、学費や生計を立てていた。この11年間、中国語を学ぶ日本人学生の質問から色々なヒントを得、中国語話者として、なんの抵抗もなく、自然に覚えた自国語である中国語を、改めて認識し、より客観的に見つめ直すことができるようになった。

日本留学の終止符を打って、「完全撤退」をしたのは1998年の夏であった。就職先は中国広東外語外貿大学(その前身は広州外国語学院[大学])で、大学院生に語彙論という専門科目をはじめて担当した。11年ぶりの母国での生活、言葉に敏感な私には、何もかも新鮮で、分かっている言葉も、実はあまりよく分かっていないような毎日であった。2003年4月から客員研究員として神戸女学院大学に一年間お世話になり、そのおかげで、本書の刊行まで至った。

拙いながらも最初の一步となるべき本書を、指導してくださった故鈴木一彦先生に捧げたい。筆者が東洋大学大学院博士後期過程のころ、同じ志を持ち、同じ指導教官の根上剛士先生のもとで学びながら図らずも病にたおれ、博士号の夢を実現することなく、若い命を異国他郷に落としてしまった故羅玲玲後輩に捧げたい。中国人日本語学習者及び日本人中国語学習者の皆さんに捧げたい。

2004年4月22日

許羅莎

目 次

序文	1
まえがき	1
0 章 先行研究と本研究との位置づけ	1
1. 日本における語彙研究・意味研究	1
1.1 日本における主要な語彙論の研究	1
1.1.1 林大 (1957) による語彙体系のとらえ かた	1
1.1.2 柴田武 (1971, 1988 (P133-153) に再録) による 語彙体系のとらえかた	5
1.1.3 前田富祺 (1974, 1975 (P55-76) 所収) による語 彙体系のとらえかた	7
1.1.4 玉村文郎 (1975, P31-42) による 語彙体系のとらえかた	9
1.1.5 宮島達夫 (1977, P1-42 ; 1994. 12 再録 P7-42) による語彙体系のとらえかた	11
1.1.6 田中章夫 (1978) による語彙体系のとらえ かた	12
1.1.7 佐藤喜代治編 (1982. 7-1983. 11) 『講座日 本語の語彙』 (全 11 巻、別巻 1)	14
1.2 日本における主要な意味研究	15

1. 2. 1	柴田武・国広哲弥他(1976, 1979, 1982)による 意味研究.....	17
1. 2. 2	森田良行(1977, 1980, 1984)による意味 研究.....	18
1. 2. 3	久島茂(2001)による意味研究.....	19
1. 3	ここまでの問題整理.....	19
2.	基本的な立場.....	21
3.	本書の構成.....	23

第一部 感情語彙の研究

1 章	感情の分類.....	31
1.	心理学による感情の分類.....	31
1. 1	マックス・シェーラーの感情分類.....	32
1. 2	第一の層——感覚的な感情.....	33
1. 2. 1	味覚.....	34
1. 2. 2	嗅覚.....	34
1. 2. 3	聴覚.....	34
1. 2. 4	視覚.....	35
1. 3	第三の層——さまざまな感情・情緒.....	35
1. 3. 1	情緒の種類.....	36
1. 3. 2	情緒のあらわれ.....	36
1. 3. 3	欲求と情緒.....	37
1. 3. 4	態度と情緒.....	39
1. 4	まとめ.....	40
2.	類義語辞書による感情語彙の分類.....	41
2. 1	国立国語研究所(1964)『分類語彙表』	

秀英出版	42
2.2 大野晋他 (1981) 『角川類語新辞典』 角川書店	44
2.3 倉石武四郎 (1963) 『岩波中国語辞典』 岩波書店	47
2.4 梅家駒他 (1983) 『同義詞詞林』 上海辞書出版社	51
 2章 “七情六欲”に見られる感情の諸相	56
1. “情” “欲” の語釈	57
1.1 “情”	57
1.2 “欲”	59
1.3 “情欲”	60
2. “情” “欲” の種類	61
2.1 “六情” の諸説	62
2.1.1 数字と陰陽	62
2.1.2 五性と六情	63
2.1.3 情と十二支	64
2.1.4 喜怒、哀楽、好惡の対立と相関	66
2.1.5 仏教説	66
2.2 “七情” の諸説	67
2.2.1 儒教説	67
2.2.2 中国伝統医学説	68
2.2.3 “喜・怒・哀・懼”	69
2.2.4 “愛・惡”	70
2.2.5 “欲”	70
2.3 “六欲”	72

3. まとめ.....	74
3 章 日本語・中国語における感情語彙の特徴	
—「怒り」「喜び」「悲しみ」を中心に—.....	77
1. 「怒り」「喜び」「悲しみ」の語彙全貌.....	77
1.1 「怒り」の表現.....	77
1.2 「喜び」の表現.....	79
1.3 「悲しみ」の表現.....	81
1.4 まとめ.....	84
2. 感覚語から感情語へ.....	85
2.1 はじめに.....	85
2.2 純粹な感情語.....	86
2.3 感覚語から感情語に転じたもの、または、 五感を連想させるもの.....	87
2.3.1 喜び.....	87
2.3.2 怒り.....	87
2.3.3 悲しみ.....	89
2.4 付随動作のいろいろ.....	91

第二部 感情語の意味・用法の記述的研究

4 章 怒り	97
1. 用言による「怒り」の表現.....	97
1.1 a 怒る・b 憤慨する・c 憤る.....	101
1.1.1 文体.....	102
1.1.2 擬似意思用法と擬人化用法.....	102

1.1.3	原因	103
1.1.4	内面性と外面性	104
1.2	「怒る」について	105
1.2.1	「怒る」の文法的働き	105
1.2.2	「怒る」に対応する中国語	106
1.2.3	「怒る」に対応する中国語	107
1.3	d腹を立てる・e腹が立つ・f頭に来る・gいきり立つ	109
1.3.1	文体	110
1.3.2	擬似意思用法と擬人化用法	111
1.3.3	原因	111
1.3.4	状態と変化	112
1.3.5	内面性と外面性	113
1.3.6	「d腹を立てる・e腹が立つ」の人称制限	114
1.4	h癪に障る・iむかつく・j気に障る	118
1.4.1	原因	118
1.4.2	程度	120
1.4.3	生理感覚	120
1.4.4	「むかつく」の乱用について	121
1.5	まとめ	121
2.	擬態語による「怒り」の表現	123
2.1	aカッと・bムカッと・cムツと	124
2.1.1	原因	125
2.1.2	心態・様態	126
2.1.3	言動に及ぶかどうか	126
2.1.4	怒りを感じる部位	127

2.1.5	主体	127
2.2	d ムカムカ・e ムシャクシャ・f カッカ (と)	128
2.2.1	原因	129
2.2.2	心の動きの持続性・生理的感覚	130
2.2.3	構文上の違い	131
2.2.4	主体	132
2.3	g カンカン・h プンブン・i プリプリ	132
2.3.1	原因	134
2.3.2	外面性	135
2.3.3	程度の差	136
2.3.4	構文	137
2.4	まとめ	137
5 章	喜び	141
1.	用言による「喜び」の表現	141
1.1	a 喜ぶ	143
1.1.1	意味特徴	143
1.1.2	日本における「喜び」に関する先行論文	145
1.1.3	「喜ぶ」の客観性と動作性	146
1.1.4	「喜ぶ」には人称の制限があるか	148
1.2	b 喜ばしい・c うれしい	150
1.2.1	感じ手・判じ手	150
1.2.2	喜ぶ値打ちの度合い	151
1.2.3	原因となる事柄が自分のこと、または、他人のこと	151
1.2.4	改まった場面・上下関係	152

1.2.5 「喜ぶ」「うれしい」に対応する中国語....	152
1.3 d 楽しい・e 愉快的・f おもしろい	154
1.3.1 意味特徴	154
1.3.2 心が高ぶる・受動的	156
1.3.3 体験を通じて、快感を覚える	156
1.3.4 能動的、持続的	157
1.4 まとめ	158
2. 擬態語による「喜び」の表現	160
2.1 a ウキウキ・b ワクワク・c ゾクゾク	162
2.1.1 内面的・外面的	163
2.1.2 快の感情が生じる時点.....	164
2.1.3 程度の差	166
2.2 d ニコニコ・e ニコッと・f ニッコリ.....	166
2.2.1 抽象性	168
2.2.2 持続的・瞬間的	168
2.2.3 瞬間的な動作・瞬間的な状態.....	169
2.3 g ニンマリ・h ホクホク	170
2.3.1 内面的	171
2.3.2 褒貶の差	171
2.4 まとめ	172
6章 悲しみ	178
1. 用言による「悲しみ」の表現	178
1.1 a 悲しい・d 悲しむ	180
1.1.1 「悲」「哀」の造語に見られる特色	180
1.1.2 原因.....	185
1.2 a 悲しい・b 寂しい・c 辛い.....	190

1.2.1 a 悲しい・b 寂しい.....	191
1.2.1.1 感覚語としての「寂しい」.....	191
1.2.1.2 感情色彩の濃い属性形容詞とし ての「寂しい」.....	191
1.2.1.3 感情語としての「寂しい」.....	191
1.2.2 a 悲しい・c 辛い.....	193
1.2.2.1 感覚語としての「辛い」.....	193
1.2.2.2 感情色彩の濃い属性形容詞とし ての「辛い」.....	194
1.2.2.3 感情語としての「辛い」.....	194
1.3 d 悲しむ・e(心が)痛む・f(心を)痛める・g (心が)傷つく.....	196
1.3.1 意味特徴.....	196
1.3.2 e 心が痛む・f 心を痛める.....	198
1.3.3 g 心が傷つく.....	200
1.4 まとめ.....	202
参考文献	207
論文・著書.....	207
辞書類〔日本語〕.....	222
辞書類〔中国語〕.....	224
索 引	226
人名.....	226
語彙・日本語.....	229
語彙・中国語.....	234
事項.....	238

0 章 先行研究と本研究との位置づけ

1 日本における語彙研究・意味研究

1. 1 日本における主要な語彙論の研究

日本における語彙研究の歴史は浅いと言われ、語彙研究史上、最初に「語彙は常に各要素が張り合っている統一体である。」と論じたのは泉井久之助（1935）であり、言語学的な研究が本格的になってきたのは、1950年代を迎えてからだと言われている。1950年代後半の林大（1957）の有名な「星図になぞらえた語彙表」から、1980年代半ば頃の語彙研究の集大成とも言うべき佐藤喜代治編（1982. 7-1983. 11）『講座日本語の語彙』（全11巻、別巻1明治書院）まで、先導的役割を担う人々の研究が確かな一段階を踏んだという印象が深い。

この節では、時間の流れに沿って、日本における主要な語彙論の研究を見ていきたい。

1. 1. 1 林大（1957）による語彙体系のとらえかた

●語彙とは何か

語彙というのは、単語の集り（集合）である。単語のどんなものの集合かによって、次のように大きく二つに分けられる。